

教員生活 42 年を振り返って

今津重紀

(宇部フロンティア大学短期大学部名誉教授・保育学科元主任教授)

My Life as a Teacher for 42 years in Department of Nursery Education

Shigeki Imazu

(Department of Nursery Education, Ube Frontier College ; Former Department Chief Professor)

筆者は、保育学科が創設されて間もなくのころより、定年退職を迎えるまで、一貫して同学科の教員として奉職した。42年という長きにわたった保育学科での教員生活を振り返り、学科のあゆみの一端を記述する。

キーワード：保育学科，短期大学

1. はじめに

宇部短期大学に私が奉職した昭和42年は、保育科(当時)が誕生して間もない時期であり、学生数は50名と少なく、教員、学生共に希望に燃え、アットホームで活気に満ちた雰囲気だった。当時、私は短大と付属中学校の授業、高等学校の部活動を掛け持ち、総合学園ならではの教員生活を送っていた。この時期、音楽室は中学校と短大が共同で使用し、教室の後ろにピアノ練習室がわずか5室あるだけだった。いつも昼休み前の2コマ目が終わる時刻になると「キャー」という悲鳴とバタバタと廊下を走る足音が聞こえて来る。学生達が昼の休み時間を利用してピアノの練習をするために我先にと練習室の確保にと突進してくるのである。少しの時間を活用して練習するという前向きで熱心な姿勢の学生が多かったように思う。

2. 音楽と保育・幼児教育

私は保育者養成のピアノ指導に取り組んできた。ピアノが弾けることは就職にも直結する。短大入学生の約三分の一は、ピアノの未経験者である。その学生達に限られた期間、限られた時間で一定のレベルの技術を身に付けさせることは大変難しい。しかし、就職の条件として「ピアノがどれくらい弾けるか」を望む環

場の声は多い。私は就任当初からこのピアノ至上主義に疑問を持っていたが、現場の要請を無視するわけにもいかず、ましてや就職率に影響が出るとなれば何とかしなければならぬ。「保育者としてピアノが弾ける」とは？多くの養成校がこの問題を抱えていた。入学試験にピアノをとの考えもあったが音楽大学でもあるまいし、ピアノが弾けなければ保育者になれないという考えは私の中にはありえなかった。

昭和50年に一年間ドイツにピアノの勉強に行く機会を得た。ドイツでは下宿生活であったが、ちょうど下宿先のお嬢さんが保育者養成校の学生であった。自分の日本での職業のことを話すと、明日幼稚園の見学実習があるので一緒に来ないかと言われた。翌日飛び入りで見学実習に参加させてもらうというまたとない幸運に恵まれた。

幼稚園に入ってまず感じたことは、静かだということである。各保育室にはピアノがなく、園児たちは先生の周りを取り囲み、歌をうたったり絵を描いたりしていた。何より驚いたのは、保育者が音叉を持っていたということである。保育者は、一点イ音から始まりの音を取り、園児達と楽しそうに歌っている。ドイツの幼稚園で使用している子どもの歌<キンダーリーダー>の多くは、メロディーも簡単で伴奏譜もなく至ってシンプルである。グレゴリオ聖歌に見られるように音楽の起源は無伴奏の斉唱であった。

日本の幼児歌曲は、歌も難しいし伴奏も難しい曲が多い。まだ人間の出発点にある幼児は保育者と向き合い、一緒に基本リズム中心の簡単で表現しやすい歌で充分のように思う。ピアノは表現力のあるすばらしい楽器であるが使い方を誤るとただの黒い怪物と化す。ピアノのスペシャリストは各園に1名いればよく、保育者すべてにレベルの高い技術を要求する必要はないようにも思われる。ピアノの代用としてギターやアコーディオンをカリキュラムに取り入れてはみたが、伴奏楽器としてある程度使いこなせるまでが大変である。またコードによる簡易伴奏法にも取り組んだが、コードを覚えることが難しく伴奏が平易になったからといって特に歌が歌いやすくなるようでもない。定年退職後、非常勤としてお世話になった時、短大と高校のグレード試験に立ち会わせていただいた。内容はピアノソロ、独唱、弾き歌いであったが、歌だけだと結構表現豊かに歌う学生、生徒いたが、その学生達も弾き歌いとなると途端に歌も聞こえなくなりピアノも弾けなくなり、やはりピアノが足かせになっているように思えた。ピアノを専門的に勉強する人は厳しい練習、訓練が必要であるが保育者がピアノの為に子どもたちと音楽する心を忘れてしまうのは残念である。

3. 学科の取り組み

私が就任した42年間、様々な出来事があった。香川学園音楽祭、開学25周年を記念し、文化会館ホールで二年生全員が参加して行ったオペレッタ「ヘンデルとグレーテル」の上演、学科25周年を記念して同じく文化会館で二日間にわたって開催した卒業研究発表会。ラテンバンドを結成し、KRYテレビに出演したこと等今もなお思い出として印象に残っている。

香川学園音楽祭は、学園の幼・中・高・短大が渡辺翁記念会館で繰り広げる音楽の祭典である。これは、短大創設者の新造節三学長が目指しておられた総合学園というイメージを強く印象づけた。私は当時中学、高校の吹奏楽部の顧問も兼ねており部員たちは中高の混成チームのためコンクール等に出場出来ず、唯一この音楽祭が発表の場であった。部員たちが放課後遅く

まで一生懸命練習をしていた光景が今でも私の脳裏に浮かんでくる。

「ヘンデルとグレーテル」は音楽大学の学生も取り組む本格的なオペレッタである。この大曲に大道具、小道具に至るまで二年生全員が取り組んだ。伴奏音楽も原曲はオーケストラでピアノに編曲されたものを使用した。技術的にもかなり難しいので、数人がリレー形式で担当した。全員が一丸となって取り組み、学生のみならず私にとっても素晴らしい思い出となった。またラテンアンサンブルは有志でラテン音楽を楽しもうとリズム楽器を組み合わせて演奏していたが、短大生のラテンアンサンブルは珍しいのかKRY山口放送のテレビ局から出演の依頼があり、お揃いのコスチュームを皆で考え、緊張の中スタジオで演奏したことも今となっては懐かしい思い出である。



中四国保育学生研究大会は、毎年秋に開催されている。保育者養成課程に学ぶ他大学の学生と交流を持つことは学生のみならず引率する教員にとってもお互いに刺激となり得るものが大きい。私も何回か学生と一緒に参加したが、研究会や交歓会はもちろん宿舎での学生の様子を見るとそれぞれの学校の特徴が読み取れ大変参考になった。

4. ますますの発展を祈念して

退職前の数年間は、学生数の減少など次第に短大が厳しい状況に置かれるようになり、カリキュラムの変更や書類の準備等夜を徹して先生方と協議したことを

忘れることは出来ない。主任時代は、難しい局面も多々あったが、何とかやり終えることが出来たのは先生方のしっかりしたサポートのお蔭である。また退官の際には記念同窓会を開いていただき、約 200 名の卒業生が参加、ただただ感謝の気持ちでいっぱいである。

私の教育者としての基礎は最初の 6 年間、この時期短大に限らず、中学、高校でのいろいろな経験がその後の教育の礎となったことは間違いない。

今回保育学科 50 年を迎えられ、誠に喜ばしい限りである。これまで六千余名の卒業生を送り出した伝統は色あせることはないだろう。保育学科のますますの発展を心より祈念して見守り続けたいと思う。



平成 19 年度 敬送会 国際ホテルにて



